筑紫女学園大学リポジト

Outlaw Ballads in the Nineteenth Century (2) : Leigh Hunt's Ballads on Robin Hood

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮原, 牧子, MIYAHARA, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/945

19世紀アウトロー・バラッド詩の系譜(2)

―Leigh Hunt のロビン・フッド・バラッド詩―

宮　原　牧　子

Outlaw Ballads in the Nineteenth Century (2)

―Leigh Hunt's Ballads on Robin Hood―

Makiko MIYAHARA

序

19世紀はじめ、ロビン・フッドをはじめとするアウトローを題材とした詩や小説が多く書かれたが、中でも1818年は特別な年であった。

> 1818 has claims to be considered the *annus mirabilis* of Robin Hood literature ― the year in which Sir Walter Scott began dictating *Ivanhoe*, Thomas Love Peacock started writing *Maid Marian*, and John Keats composed his own 'dirge of a national legend'.[1]

Sir Walter Scott（1771－1832）の『アイヴァンホー』と Thomas Love Peacock（1785－1886）の『メイド・マリアン』（バラッド詩 "Bold Robin Hood"、"Robin Hood and the Two Grey Friars"、"The Friar of Rubygill" を収録）[2]が出版されたのはそれぞれ1819年と1822年であるが、その執筆開始はいずれも1818年であったと言われている。John Hamilton Reynolds（1794－1852）が John Keats（1795－1821）に宛てた手紙の中でロビン・フッドを主題とした２編のソネットを送り、キーツがその返歌としてバラッド詩 "Robin Hood: To a Friend" と "Lines on the Mermaid Tavern" をレノルズに送ったのが1818年２月３日のことであった。キーツ作品に対してレノルズはさらに１編のソネットを書き送っており、レノルズの計３編のソネットは、その直後 *The Yellow Dwarf*（February 21, 1818）誌上で発表されている。上記の引用に従うならば、Leigh Hunt（1784－1859）が、自らが主宰する *The Indicator* において４編のロビン・フッド・バラッド詩を発表したのは、ロマン派詩人たちがこぞってロビン・フッドを題材とする作品の執筆にとりかかった２年後、つまり多様な作品が出揃った後であったということになる。[3]

ロビン・フッドを題材とした作品が一挙に世に生み出されたことには、Joseph Ritson のロビン・フッド・バラッド・コレクションが1817年に再版されたことが大きく影響していると考えられている。[4] Mitchell が 'Ritson's appropriation of Robin Hood as a revolutionary hero for a revolutionary age was well within the tradition of Robin Hood's received cultural significance' [5]と指摘するよう

に、フランス革命支持者であったリットソンは、革命の時代にこの上なく相応しい愛国者としてのロビン・フッド像を定着させた。[6]リットソンの影響を大きく受けたスコットは、『アイヴァンホー』において愛国的アウトロー、ロビン・フッドを作品中重要な脇役として描いた。こうしてロマン派第二世代の詩人たちは、リットソンとスコットの両者の影響を受け、アウトロー・バラッド詩を制作することとなる。19世紀のアウトロー・バラッド詩の系譜の一側面は、伝統的アウトローの世界観とゴシック的要素の融合であり、この流れの起点となったのはスコットの“Alice Brand”であったと考えられる。[7]スコットが Matthew Gregory Lewis のゴシック・バラッドに大いに影響を受けていることを考えるならば、[8]この融合は極めて自然なことである。一方で、この融合の原因には、19世紀の社会や自然の変化が挙げられよう。変化の時代にロマン派第二世代の詩人たちはロビン・フッドをどのように描いたのであろうか。本論では、４編のロビン・フッド・バラッド詩を書いたハントを中心に、ロマン派第二世代が描くロビン・フッド像の一側面を探りたい。

Ⅰ.

前述のように、リットソンとスコットはロマン派第二世代のロビン・フッド詩制作を牽引した。

> Those two writers [Scott and Ritson] lead to the revaluing of Robin Hood by writers of the Romantic Movement (with their love of the Middle Ages), a reference in a poem by Keats for instance, and a novel *Maid Marian* by Thomas Love Peacock.[9]

中世のバラッドには登場することのないマリアンがヒロインとなった小説『メイド・マリアン』には、男性本位の封建社会に対する風刺が描かれており、[10]小説全体の意図は極めて革新的である。ピーコックが小説中に挿入した３編のバラッド詩のうち“Bold Robin Hood”は、‘Oh, bold Robin Hood is a forester good, / As ever drew bow in the merry greenwood’(st. 1)[11]と、中世のロビン・フッド・バラッドそのままの雰囲気を再現した作品である。作品中２度繰り返される‘Robin and Marion, Scarlet, and Little John, / Long with their glory old Sherwood shall ring’(sts. 4 & 6)は、後述するキーツ作品に比べ楽観的にロビンの栄光を称える。尤も、マリアンの美しさをうたう２連目には‘A sweet garden-flower, she blooms in the bower, / Where alone to this hour the wild rose has been’と、古いバラッドには見られないロマン派詩人ならではの細やかな描写が見られる。“Robin Hood and the Two Grey Friars”は‘Bold Robin has robed him in ghostly attire, / And forth he is gone like a holy friar’(st. 1)と、ロビン・フッド・バラッドにお馴染みの変装のモチーフを取り入れた作品である。聖なる修道士に変装したロビンが、二人の本物の修道士から金を盗むという物語であるが、そこには中世のバラッドのような残忍さは全く無い。19世紀に愛国的英雄として生まれ変わった、野蛮さを失った大人しいアウトロー、ロビンである。各連で繰り返される二つのリフレインのうちの一つ‘All on the fallen leaves so brown’は、後述するハントのロビン・フッド・バラッド詩にも共通する、中世バラッドにもブロードサイド・バラッドにも見られない秋の落葉とい

うモチーフを使ったロマン派的な表現である。小説の第16章にマリアンがうたう歌として登場するもう一編のバラッド詩“The Friar of Rubygill”は、他の２編とは全く様相が異なる。この章の冒頭には伝承バラッド“Robin Hood and the Curtal Friar”(Child 123）が引用されており、小説はこの伝承バラッドの物語をなぞり、ロビンが後に仲間に加えるタック和尚と川の中で対決するという痛快なエピソードが描かれている。しかしこの章に登場するバラッド詩には伝承の明るい雰囲気はまるで無く、スコットの「アリス・ブランド」によく似た陰鬱さがある。その内容は、ある乙女にまつわる伝説である。はじめにタック和尚が歌をうたうが、それを聞いていたマリアンは和尚が伝説を誤解しているとうたい直す。タック和尚が、乙女が愛する修道士に会うためにボートに乗って川を渡る途中波にのまれて命を落とした顛末をうたったのに対し、マリアンは乙女が亡くなる前の、乙女と修道士の逢瀬の物語をうたう。乙女の‘Over! over!’という呼び声に応じてボートを出すRubygillの修道士は、緑の森の木に忠誠を誓うも、一歩森を出れば誓いを忘れてしまう男であるが、庵の中でだけは‘ghostly elf’によって罪を浄められるとうたわれる。このように、ピーコックのバラッド詩には、リットソンの影響もスコットの影響も同様に見られる。

Knightが指摘するように上記の詩人たちの中ではレノルズが一番無名ではあるが、レノルズはロマン派の新しいロビン・フッド・ブームの火付け役としての重要な役割を果たした。[12]レノルズの３編のソネットにもまた、スコットのバラッド詩にも共通するゴシック的要素が認められる。

> The trees in Sherwood Forest are old and good, —
> The grass beneath them now is dimly green;
> Are they deserted all? (“To a Friend, on Robin Hood” ll. 1–3)[13]

ソネットでありながら、１行目の表現はいかにも中世バラッド的である。しかし、森にはすでにロビンたちの姿はなく、そのため２行目に描かれる「古き良きシャーウッドの森」に生える下草は‘dimly green’という、古いバラッドにはありえない色合いをしている。ロビンたちが去った森の暗さは、図らずもスコットがアウトロー・バラッドに取り込んだ異界の様相、例えば19世紀末のYeatsらによるアイルランド文芸復興運動に通じる薄暮を連想させる。

> Go there with summer, and with evening, — go
> In the soft shadows, like some wandering man, —
> And thou shalt far amid the Forest know
> The archer–men in green, with belt and bow,
> Feasting on pheasant, river fowl, and swan,
> With Robin at their head, and Marian. (“To a Friend, on Robin Hood” ll. 9-14)

夜という設定もまた、伝統的なロビン・フッド・バラッドには無い。ロビンたちの不在による喪失感を想像力で埋めることがレノルズのソネットの主題であるが、想像力で生み出された、まるでこ

の世のものとは思われない実体感の希薄なロビンたちは、夜という設定も相まってまるで亡霊のようでもある。レノルズは3作目のソネットにおいてはより明白に、'Days of undying pastoral liberty'（l. 11）は 'Days, shadowy with the magic greenwood tree'（l. 14）であると、ロビンの時代の森とは明らかに変容した、影なす世界である魔法の森を描いている。

レノルズのソネットへの返歌として書かれたキーツのバラッド詩は、Barnard が指摘するように、レノルズと比較し 'less sentimental and more political'[14]である。

All are gone away and past!
And if Robin *should* be cast
Sudden from his turfed grave,
And if Marian *should* have
Once again her forest days,
She would weep, and he would craze:
He would swear, for all his oaks,
Fall'n beneath the Dock-yard strokes,
Have rotted on the briny seas;
She would weep that her wild bees
Sang not to her — "strange that honey
Can't be got without hard money" ("Robin Hood: To a Friend" ll. 37-48)[15]

キーツの主張は明確である。Mitchell が 'Keats could count upon his readers accepting this appropriation of the Robin Hood legend to embody the "Outlawry" of his indictment of the times, for Robin Hood had come to symbolize the defiant hero of political justice'[16]と指摘するように、キーツにとってロビンとは、政治悪と戦う英雄であった。42行目から48行目にかけてキーツは時代の商業主義を批判する。ロビンの森の木々は切り倒され造船所行きとなり、マリアンの蜜蜂たちが歌声を響かせて集めていた蜂蜜（ハニー）を買うのに金銭（マニー）が必要になる。このように、レノルズのセンチメンタリティとは対照的に、キーツは皮肉に軽やかな笑いを添える。キーツ作品にはロビンの時代がもはや取り戻すことのできないことへの諦めが潔く描かれており、そこには決して足下を見失うことのないキーツの「現実感覚」[17]がある。キーツがレノルズの「ソネット」に対して「バラッド」という形式を選んだ理由もまた、この現実感覚にあると言えよう。[18]Bratton は、ロマン派の多くの詩人たちが中世のバラッドではなく、ブロードサイド・バラッドのテーマやスタイルを模倣して作品を書いたことを指摘している。そしてその特徴の一つは、バラッドの全ての行末において韻が踏まれていることであると述べている。[19]確かに'past' / 'cast'、'grave' / 'have'と韻を踏むキーツのバラッド詩のスタイルは、中世のバラッドではなくブロードサイド・バラッドのそれである。[20]さらに Bratton は、ロマン派詩人たちがブロードサイド・バラッドのスタイルを採用した理由は、それが詩人たちのテーマ、そして作品を読む読者に相応しい詩形であったからであったと指摘す

る。ここで言う読者とは、定期刊行物の読者たちであり、かつてのブロードサイド・バラッドの読者たちであった。[21]また Barnard は、キーツの‘outlawry’にはリットソンの影響が認められると指摘している。[22]レノルズのようにセンチメンタリティをもってロビンの時代を振り返るのではなく、ロビンをモチーフに現代社会を批判するバラッド詩を書いたキーツの立場は、確かに現代の政治的視点から愛国者ロビン・フッド像を提示したリットソンのそれに近い。キーツの目的は過去を懐かしむことではなく社会や政治に対する批判であり、その姿勢はハントに引き継がれる。

Ⅱ.

自身をアーサー王、その仲間たちを円卓の騎士に準えられたハントであるが、保守派に疎まれる彼の存在はむしろロビン・フッドのそれに近い。自ら政治的定期刊行物を主催したハントが描いたロビンとは、どのような英雄であったのだろうか。*The Indicator* 第13巻（Wednesday, January 5th, 1820）でハントは“Thieves, Ancient and Modern”というエッセイを書き、次のようにロビン・フッドを評している。

> The prince of all robbers, English or foreign, is undoubtedly Robin Hood . . . . Robin Hood will still remain the chief and “gentlest of thieves.” He acted upon a larger scale, or in opposition to a larger injustice, to a whole political system. He “shook the superflux” to the poor, “and shewed the heavens more just.” However, what we have to say of him we must keep till the trees are in leaf again, and the greenwood shade delightful. [23]

ハントにとってのロビン・フッドの敵とは悪い司教や代官たちではなく、より巨大な社会悪、政治悪である。引用中の‘shook the superflux’とは、Shakespeare の *The History of King Lear*（The Folio Text）第３幕４場の‘Take physic, pomp, / Expose thyself to feel what wretches feel, / That thou mayst shake the superflux to them / And show the heavens more just.’からの引用である。[24]この引用からも明らかなように、ハントはロビン・フッド作品によって、社会に「天に正義があることを示」そうとしたのだと考えられる。

ハントの４編のバラッド詩のあらすじは以下の通りである。

１.“Robin Hood a Child”：幼いロビンが母親と一緒に叔父のガメリンの見舞いに行くが、ガメリンの館で待っていたのはヴィア修道院の修道士たちであった。大修道院長はロビンたちに、ガメリンが昨晩亡くなったこと、財産は遺言により全て修道院に遺されたことを告げる。悲しみに打ちひしがれた人々と共にガメリンの葬儀を終えた後、ロビンとその母親はロクスリーの町へ戻っていく。その帰り道「もし自分が王ならば、修道士たちの悪巧みを暴くことができるのに」と言うロビンに母親は「お前ならきっと民に愛される王（‘a King of Men’）になれる」と答える。

２.“Robin Hood’s Flight”：ロビンの母親が亡くなって12年の年月が流れた。ロビンはヴィア修道

院長によって奪われた財産になど興味はなかったが、亡くなった母親のこと、貧しさに苦しむ人々のことを思うと、修道院や国王に憤りを感じていた。そこに仲間のウィルが現れる。ロビンは、腹をすかせたウィルのために御料林の中のシカを殺して食べさせる。そこに大修道院長が森番の男たちを連れてやって来てロビンを捕らえようとするが、ロビンらは大修道院長らを返り討ちにする。森番の一人がロビンの仲間となり、ロビンとウィル、そしてこの森番はロクスリーの町を後にする。

3. "Robin Hood an Outlaw"：自由なアウトロー、ロビン・フッドは、森の中で楽しく暮らしていた。ロビンを捕らえようとやって来たものは皆、ロビンの仲間になってしまうのだった。ロビンは「汚い世の中ではあるが、自分は決して仲間を裏切らない」と断言する。

4. "How Robin and His Outlaws Lived in the Wood"：ロビンとその仲間たちは、森の中で気ままに暮らしていた。やがてそこに、兄の館から逃げ出してきたマリアンがやって来る。ロビンとマリアンは、皆が望む統治を行う。ロビンは修道士や聖職者たちを襲い金品を奪っては、貧しい者たちに分け与える。

ハントはまるでロビンのクロニクルを作成するかのように、ロビンの生い立ちからその活躍までを描いている。[25]韻はブロードサイドではなく中世のバラッドの模倣しており、その点においてはキーツの方がむしろ政治的と言えるのかもしれない。しかしその内容にはキーツを意識したと思われる表現が多々見られる。

Barnard は、レノルズのソネットが掲載されたのがハントの兄 John Hunt が編集を務める *The Yellow Dwarf* であることから、ハントがレノルズのソネットを読んでいたことはほぼ確実であろうことを述べ、[26]さらにハントがキーツのロビン・フッド・バラッド詩を1818年の時点で既に読んでいた可能性についても指摘している。また、1820年のハントのロビン・フッド・バラッド詩執筆のきっかけについて、次のように述べている。

> The publication of Keats's poem in July 1820 probably prompted Leigh Hunt to publish his four poems on Robin Hood in the *Indicator* in November 1820. These celebrate the greenwood outlaw's fight against oppression both of church and state, as well as the good living in the natural forest. They give a clear, if simplistic, expression to Hunt's political feelings.[27]

ハントのロビン・フッド・バラッド詩執筆には、何よりもキーツの影響が大きい。ハントがそのほとんど全てを執筆したという *The Indicator* 第1巻（Wednesday, October 13th, 1819）の冒頭部分にはその名の由来について次のような一節がある。

> There is a bird in the Interior of Africa, whose habits would rather seem to belong to the interior of Fairy-land: but they have been well authenticated. It indicates to honey hunters where the nests of wild bees are to be found. It calls them with a cheerful cry, which they answer; and on finding itself recognized, files and hovers over a hollow tree containing the

honey. While they are occupied in collecting it, the bird goes to a little distance, where he observes all that passes; and the hunters, when they have helped themselves, take care to leave him his portion of the food.

The Examiner とは異なり、*The Indicator* は文学に特化した刊行物であった。ハントは文学による民衆の幸福増進目的とした *The Indicator* とは、‘wild honey’ を見つけることのできる鳥の名に由来すると述べている。つまり、この「野生の蜂蜜」とは文学の本当の楽しみを指す。キーツがバラッド詩の中で、現代においては金銭を払わなければ手に入れることのできないと描いたマリアンの蜂蜜がモチーフとなっていることは偶然であるとしても、これを書いたハントの脳裏にキーツの詩行が浮かぶことはなかったろうか。

キーツはその蜂蜜を手に入れるのに金銭を払わなければならないマリアンの嘆きを描いたが、ハントは敢えて経済活動の中にロビンを取り込む。

Robin Hood's mother, these twelve years now,
  Has been gone from her earthly home;
And Robin has paid, he scarce knew how,
  A sum for a noble tomb. (“Robin Hood's Flight”, st. 1)

貴族の血を引く家系に相応しい母親の墓の建設のため、ロビンは金銭を支払う。しかしハントは決してそこに頓着しないロビンを描くことにより、キーツと同じくロビンの反資本主義的人物像の形成に成功しているのである。Eberle-Sinatra が ‘Hunt's presentation of nature is not as a contrast or alternative to human society but the site of a busy social environment of a similar kind’[28]と指摘するように、ハントにとってはロビンが暮らす森の中でさえ、社会の一環である。ロビンといえども、物のやり取りには金銭が必要となる。ハントはキーツに勝るとも劣らぬ現実感覚をもって、ロビン・フッドの世界を描いていると言えよう。

またハントは作品中、古い中世のバラッドやブロードサイド・バラッドには決して描かれることになかった秋の情景を描く。

Ancle deep in leaves so red,
  Which autumn there had cast,
When going to her winter-bed
  She had undrest her last. (“Robin Hood's Flight”, st. 33)

突然登場するこの秋の情景を、蜜蜂が蜜を蓄え、緩やかに暮れゆく陽の光が地をバラ色に染める秋の情景を描いたキーツに捧げるハントのオマージュと読むことは、深読みが過ぎようか。

一方で、革新派ハントの作品には、リットソンやスコットの影響も認められる。ハントのロビン

もまた、国を代表する愛国者に相応しく‘gentle’(“Robin Hood a Child”, st. 5）や‘noble’(“Robin Hood a Child” st. 7）や‘a proper knight’(“Robin Hood's Flight”, st. 18）といった表現でその血筋の高貴さが強調されている。また、“How Robin and His Outlaws Lived in the Woods”の後の改訂版では、その敵はノルマン人のみであることも明言されている。[29]ハントが“Robin Hood's Flight”の中に描くロビンは、清廉潔白な若者である。若さと力と健やかさに恵まれたロビンは、大修道院長に奪われたガメリン叔父の遺産になど未練は無く（st. 4)、貧しい者への共感を忘れることは無い（st. 7)。

And then bold Robin he thought of the king
  How he got all his forests and deer,
And how he made the hungry swing
  If they killed but one in the year. (“Robin Hood's Flight”, st. 9)

これほどあからさまな国王批判は、古い中世のバラッドにおいてもブロードサイド・バラッドにおいてもあり得ない。この連は過去のバラッドではなく、摂政皇太子を嘲罵した罪で投獄された経験を持つハント自身の姿を彷彿とさせる。さらに4作目のバラッド最終部においてハントは、再び従来のバラッドから逸脱した表現で読者を驚かせる。

See here now is a plump new coin,
  And here's a lawyer's cloak,
And here's the horse the bishop rode,
  When suddenly he woke.

And you there, Wat of Herefordshire,
  Who such a way have come,
Get upon your land-tax, man,
  And ride it merrily home.

(“How Robin and His Outlaws Lived in the Woods”, sts. 21 & 23)[30]

引用の‘a plump new coin’は、キーツのバラッド詩48行目の‘hard money’を意識した表現であろう。[31]キーツが現実の行き過ぎた資本主義を厳しく見つめるのに対し、ハントはより楽観的に希望を見出しているようである。また、‘Wat of Herefordshire’とは、Knightが‘choosing a name suggestive of the Peasants' Revolt, Hunt combines economic restitution with a more political version of merriness than is usual’[32]と指摘しているように、Peasant's Revoltの指導者、Wat Tyler（？－1381）であると考えられる。4編のバラッド詩中この連は、ロビンを生み出したバラッド風土から最も逸脱している。[33]ロマン派時代に書かれた詩作品の中のロビン・フッドは、それぞれの詩人の政

治的な視点を具現化したものである。[34]唐突に登場した実在の革命指導者の名前には、ハントの社会批判精神が凝縮されているのである。

ロビン・フッドの時代の社会がロマン派第二世代の詩人たちの時代のそれと大きく違っているように、森を含めた自然環境もまた大きく変化していた。神話は19世紀の人々にとって、すでに太古のものとなりつつあったのである。

> Robin Hood poems only fill a slender space among the expanses of the myth in prose and play over the last two centuries. And yet they have a special importance, because it was non-narrative poetry that focused most sharply the issues at stake in the nineteenth century, as people who were more or less modern considered the meaning of a myth now distinctly ancient. The positions taken and the problems realized — not always consciously — by the few poets who then rehandled the outlaw myth give in fact a fine view of the core of modern responses to the tradition. From a surprisingly early date they shaped what we have slowly learned to call a 'heritage' position focused on the greenwood, a viewpoint validating an account of the modern world which is usually one of dissatisfaction, often sheer cultural escape, and sometimes one involved with aspects of national pride.[35]

伝承バラッドとは趣の異なる19世紀の詩人たちが描く「緑の森」の背景には、中世から19世紀にかけて大いに変容した自然環境、そしてそこを舞台に作品を書く詩人たちの意識がある。

> Hunt offers a socialized scene of writing. He depicts himself writing not in splendid isolation, alone with nature, but at a desk in the city surrounded by historical and political texts.[36]

向けられた批判の真偽はともかく、「コックニー・スクール」と呼ばれた詩人ハントの描く自然が、現実のそれと乖離したものであったとしても不思議はない。ハント以降、19世紀のアウトロー・バラッド詩は、その舞台を緑の森ではなく、その外の世界としていくことにも納得がいく。

> Robin Hood, and the forester,
> And Scarlet the good Will,
> Struck off among the green trees there
> Up a pathless hill . . . . (“Robin Hood’s Flight”, st. 35)

ロビンたちが進むのは、中世のバラッドにうたわれるような勝手知ったる森ではなく、「道なき道」として描かれている。この表現には確かに詩人自身の自然との乖離が関わっているのかもしれない。しかし一方で、ハントは古いバラッドに描かれる森を再生しようと試みている。

The green leaves they looked greener still,
　And the thrush, renewing his tune,
Shook a loud note from his gladsome bill
　Into the bright blue noon. (“Robin Hood a Child”, st. 2)

１作目のバラッド詩の第一連目、１行目の‘greener’、２行目の‘renewing’には、４編のバラッド詩が織りなす新しいクロニクルの始まりとともに森の再生を試みる詩人の意図が感じられる。この試みはキーツ作品にもレノルズ作品には見られない。ハントは昔ながらの森が存在していることを、現在形を用いて表現する。

And now the travelers turn the road,
　And now they hear the rooks;
And there it is, ― the old abode,
　With all its heaty looks. (“Robin Hood a Child”, st. 13)

出来事を語るバラッドにおいて現在形の表現は極めて印象的であり、極めて効果的でもある。

結び

ハントのバラッド詩には、キーツ作品と同様にブロードサイド・バラッド的な要素が多く認められるが、その一方で、節々に見られる古い中世のバラッド的な要素が印象的でもある。[37]

Robin Hood is an outlaw bold,
　Under the greenwood tree;
Bird, nor stag, nor morning air,
　Is more at large than he. (“Robin Hood an Outlaw”, st. 1)

古いバラッドの雰囲気を再現したこの連も、現在形で書かれている。こうしてハントは時代の変化を嘆くのではなく、ロビン・フッドを再生した森に生き続ける英雄として描いた。Bratton は、中世のバラッドの要素とブロードサイド・バラッドの要素（バラッド・リバイバルのすべての要素）を混合させたのはスコットであると述べているが、[38]ハントのバラッド詩もまた、古い中世のバラッドの形式とブロードサイド・バラッド的な内容を混合した作品である。その意味では、ハントもまたスコットの流れを引く詩人であると言えるだろう。

ハントが、レノルズとスコットの影響を受け、そして何より彼らの影響を受けたキーツに刺激を受けてロビン・フッド・バラッド詩を書いたことは明らかである。キーツは1818年２月３日付の書簡の中で同時代の詩人を批判し、‘Poetry should be great and unobtrusive, a thing which enters into

one's soul, and does not startle it or amaze it with itself — but with its subject' と述べ、かつて自身が崇拝していたハントにも批判の矛先を向けている。しかし、ハントはまるでこの書簡の言葉に反論するかのように、*The Indicator* 58（1820年11月15日）号においてロビン・フッドこそ 'good old English subject' であると紹介している。レノルズ宛の手紙をハントが読んでいたわけではあるまいが、偶然にもこの言葉はハントのキーツに対する十分な反論となっていよう。ハントのバラッド詩はキーツのバラッド詩に対する、送られることのない返歌として読むことができる程に、その影響を大きく受けているのである。

注

1. R. B. Dobson and J. Taylor, *Rymes of Robyn Hood: An Introduction to the English Outlaw* (Book Club Associates, 1976) 198.
2. "Bold Robin Hood" は Ch. XI、"Robin Hood and the Two Grey Friars" は Ch. XII、"The Friar of Rubygill" は Ch. XVI に登場する。
3. "Robin Hood, a Child" と "Robin Hood's Flight" は *The Indicator*, No. LVIII.（Wednesday, November 15th, 1820）誌上、"Robin Hood, an Outlaw" と "How Robin and His Outlaws Lived in the Woods" は *The Indicator*, No. LIX.（Wednesday, November 22nd, 1820）誌上にてそれぞれ発表。ハントのバラッド詩以降、19世紀のイングランドではロビン・フッド・バラッド詩はほぼ姿を消し、代わりに実在のアウトローを題材としたバラッド詩が書かれるようになる。スコットランドでは1849年になって William E. Aytoun（1813－65）によるパロディ・バラッド詩 "Little John and the Red Friar"（1849）が発表されている。
4. Cf. Stephen Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* (Blackwell, 1994) 159. Joseph Ritson の *Robin Hood : A Collection of all the Ancient Poems, Songs, and Ballads, Now Extant, Relative to That Celebrated English Outlaw* の初版出版は1795年であるが、その後19世紀中に何度も再版された。
5. Thomas R. Mitchell, 'Keats's "Outlawry" in "Robin Hood"' <http://www.jstor.org/stable/pdf/450869.pdf> 766.　最終検索日2017. 8 . 20.
6. Cf. Stephanie L. Barczewski, *Myth and National Identity in Nineteenth-Century Britain*（Oxford, 2005）100. リットソンは、ロビンを生み出した土壌であるバラッドが国の文化的・言語学的源を探るキーテクストであることを示し、その文学史上の重要性を世に示した。
7. 拙論「19世紀アウトロー・バラッド詩の系譜（１）—Sir Walter Scott とアウトローの世界—」（筑紫女学園大学研究紀要第12号、2017年）参照。
8. Cf. J. S. Bratton, *The Victorian Popular Ballad* (Rowman and Littlefield, 1975) 17-18.
9. Geoff & Fran Doel, *Robin Hood: Outlaw or Greenwood Myth* (Tempus, 2000) 75.
10. Cf. Marilyn Butler, 'The Good Old Times: *Maid Marian*', *Robin Hood : An Anthology of Scholarship and Criticism*, ed., Stephen Knight (D. S. Brewer, 1999). チャイルド・バラッド中マリアンが登場するのは、ブロードサイド・バラッド "Robin Hood and Queen Katherine"（Child 145A）、"Robin Hood's Golden Prize"（Child 147）、"Robin Hood and Maid Marian"（Child 150）の３篇のみである。
11. Thomas Love Peacock, *Maid Marian* (Createspace Independent Publishing Platform, 2015) 74. 以下、ピーコック作品からの引用は、全てこの版に拠る。
12. Cf. Stephen Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 159.
13. *The Yellow Dwarf: A Weekly Miscellany, Issues 1-21*. (Nabu Public Domain) 64. 以下、レノルズ作品

からの引用は、全てこの版に拠る。

14. John Barnard, 'Keats's "Robin Hood", John Hamilton Reynolds, and the "Old Poets"', *Robin Hood : An Anthology of Scholarship and Criticism*, ed., Stephen Knight (D. S. Brewer, 1999) 126-27.
15. Sidney Colvin, ed., *Letters of John Keats to his Family and Friends* (Macmillan and Co., 1891) 69-70. 以下、キーツ作品からの引用、およびキーツの書簡からの引用は、全てこの版に拠る。
16. Mitchell 765.
17. 鎌田明子「John Keats の "Robin Hood" (1818) における 'the Spirit of Outlawry'」<http://www.j-ballad.com/note/46-john-keats-robin-hood-1818-the-spirit.html>最終検索日2017. 10. 5.
18. 一方で、レノルズがソネット形式を選択した理由について Knight は、'[Reynolds] disregards the directly communicating style of the ballads, and sets the outlaw and all perception of his meaning in the high-art, inward-looking and inherently private form of the sonnet' と述べている。(Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 161.)
19. Bratton 14. *Lyrical Ballads* 中のワーズワスのバラッド詩はブロードサイド・バラッドの形式で書かれている。また、Eberle-Sinatra はハントが 'common language' で詩を書いたことは、ワーズワスに対する彼の詩的・政治的忠誠であると指摘している。[Michael Eberle-Sinatra, *Leigh Hunt and the London Literary Scene: A reception history of his major works, 1805-1828* (Routledge, 2005) 6.]
20. 例えば、中世バラッド "Robin Hood and Guy of Gisborne" (Child 118) は、ほぼ一貫して abcb の韻を踏んでいるのに対し、ブロードサイド・バラッド "A True Tale of Robin Hood" (Child 154) は、ほぼ一貫して abab の韻を踏んでいる。
21. Bratton 13-14.
22. 'Keats's vision of "outlawry" is clearly related to that of Riston (though there is no evidence that he had read Ritson)' (Barnard 127).
23. Leigh Hunt, *The Indicator* <https://books.google.co.jp/books?id=HS8LAAAAYAAJ&printsec=frontcover&dq=the+indicator&hl=ja&sa=X&redir_esc=y#v=onepage&q=the%20indicator&f=false>最終検索日2017. 8 . 20. 以下、*The Indicator* からの引用、およびハントのバラッド詩の引用は、一部を除き全てこの版に拠る。例外については注に記す。
24. Stanley Welles and Gary Taylor, eds., *William Shakespeare: The Complete Works* (Clarendon, 1988) 960.
25. Knight も指摘するように、ハントの 4 つのバラッド詩に一貫性は無い。(cf. *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 170) 3 作目、4 作目からは物語性も消失し、ブロードサイド・バラッドのように台詞の数も少なくなっている。
26. 'In the privacy of his letter to Reynolds, Keats gives unambiguous expression to his poetic antagonism to Hunt. Yet the two men were meeting regularly . . . . Keats must have brought the original draft of "Robin Hood" with him, either giving it to Hunt or leaving it at his house — Shelly's draft of his sonnet "To the Nile" is actually written on the same piece of paper as Keats's draft of "Robin Hood"' (Barnard 138).
27. Barnard 125.
28. Eberle-Sinatra 65.
29. 'Only upon the Normans proud, / And on their unjust store, / He'd lay his fines of equity / For his merry men and the poor.' ("How Robin and His Outlaws Lived in the Woods", st. 17) この引用と注30の引用ついては H. S. Milford, *The Poetical Works of Leigh Hunt* (Oxford UP, 1923) に拠る。
30. 出典は注29を参照。
31. Cf. 'With a remarkable resemblance to Keats' challenging imagery of social change Robin returns

"plump new coin" to the workers whose labour was alienated to provide such luxuries . . . . ' (Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 169).

32. Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 169.
33. *The Indicator* 掲載当時の"How Robin and His Outlaws Lived in the Woods"の最終連は次の通りである。'And your there, Wat of Lancashire, / Who such a way have come, / Get upon your land-tax, man, / And ride it merrily home.'
34. Cf. 'Several poems were written during the Romantic period in which Robin Hood embodied the authors' political views' (Eberle-Sinatra 65).
35. Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 158
36. Jeffrey N. Cox, *Poetry and Politics in the Cockney School* (Cambridge UP, 1998) 7.
37. Edgecombe は"Robin Hood's Flight"の 3 連目について、'[Hunt's] model is a quatrain in Sir Patrick Spens . . . which he applies to a dual view of mother's grave and usurping abbey . . . .' [Rodney Stenning Edgecombe, *Leigh Hunt and the Poetry of Fancy* (Associated UP, 1994) 139]と指摘する。また、Knight はハント作品について、'These poems are effectively the first part of an up-to-date Garland' (Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* 167)と述べている。
38. Bratton, *The Victorian Popular Ballad* 17.

（みやはら　まきこ：英語学科　准教授）